

大学における「パーソナル・ライティング」の 教育的意義—〈私〉から他者，世界へと表現する—

谷 美奈
帝塚山大学

帝塚山大学の谷と申します。私は〈文章〉の事例を担当します。テーマは、「大学における『パーソナル・ライティング』の教育的意義—〈私〉から他者，世界へと表現する—」です。私は「パーソナル・ライティング」について、これまでに何回か発表しています。ただ、それは、アカデミック・ライティングに対するパーソナル・ライティングのあり方についての考察、つまり、アカデミック・ライティング以前に必要な、あるいはアカデミック・ライティングと相補的な役割を果たす、パーソナル・ライティングの意義についての考察でした。本日は、表現教育という観点からお話ししたいと思います。パーソナル・ライティングは、パーソナル、個人的、私的という言葉が示しているように、自己表現教育の一環でもあるためです。よろしくお願い申し上げます。

お話しする内容は、五つに分かれます。1) 問題の所在、2) パーソナル・ライティングの概要、3)、 パーソナル・ライティングの海外の動向、4) パーソナル・ライティングの教育効果の検証と考察、5) 終わりに、です。2) パーソナル・ライティングの概要がメインになると思います。

問題の所在について見ていきましょう

多くの大学でさまざまな内容の初年次教育が行われていますが、いわゆる文章作法についての教育は最も多くの大学で実施されています。その内容は、レポートや卒業論文の作成を前提に、専門学術的な知識やスキルを学生に提供する取り組みです。そのため、テクニカルな文章指導に重点が置かれがちな傾向にあるのではないのでしょうか。ここに、私の問題意識があります。

現代の大学生は文章力が低下していると言われます。その要因は何でしょうか。学生の側に一つ求めるとすれば、〈自己〉と〈世界〉にまたがる、認識の起点としての〈私〉がうまく機能していないことが挙げられると、私は考えています。つまり、書くテクニックがないというよりも、意欲的に書くモチーフ、動機やテーマが自分のものになっていない学生が増えているのではないのでしょうか。言い換えれば、多くの学生が、文章を書くとはどのようなことなのかを体験できていない、経験化されていないところに問題があるのではないかと、ということです。

〈私〉とは、〈自己〉に対しても〈世界〉に対しても起点となるべき存在です。これが機能していないとは、「表現者としての主体」が形成されていないことを意味します。「表現者としての主体」を形成せずにテクニカルな文章指導を受けるのは、いわば本末転倒ではな

いでしょうか。この問題を解決するためには、書くこと、あるいは表現することの「原初的経験」が積める教育、そして、〈私〉がうまく機能するように〈私〉を捉え返せる教育を行う必要があるはずです。

パーソナル・ライティングの概要についてご紹介します

バックグラウンドとして、高等教育における〈私〉と専門的な学問との間に著しい乖離があると考えられます。学生にとって、書く・考えることは、外在的で形式的な義務になりがちである、あるいは、内発的な学びと表現への模索や思考に結びつきにくい状況にあるのではないのでしょうか。これを解決するためにまず必要なのは、ハウツー的な技術の伝授でも専門知識の注入でもなく、書く・考えること、あるいは文章で表現することが、学生の内発的な学びや動機のきっかけになるようにすることだと、私は考えています。

以上のような私の理解を前提として、もう少し具体的にパーソナル・ライティングの教育理念をご説明します。パーソナル・ライティングの指導では、まず、日常的な出来事や生活体験を題材に思索します。経験における感覚の感受とはどのようなものかを考えてから、その経験の意味を捉え返すのです。こうした思索の中で、頭の中や胸のうちにある、あるいは先ほど横山先生がおっしゃっていた、体全体で感じている、未定形で曖昧な思いを言語化します。自分がどのような感受性や価値観を持つ人間なのかを確認する行為です。これがなければ自己表現はあり得ないのではないかと、私は考えています。次に、学生は自ら確めた言葉や表現を他者と交換しようと努力します。これによって、他者や社会、世界に対する関心が生まれ、専門課程の学びや生きるということそのもの、すなわち、「人間とは?」「世界とは?」といったような関心や意欲にもつながると考えられます。

パーソナル・ライティングの指導には、技術面を重視した文章技術指導や論文作成指導とは異なる特徴が五つあります。

一つ目は、文章のジャンルという問題です。私は、これをエッセーというジャンルであると考えています。授業では学生に、小論文やレポートではなく、エッセーを書くのであると伝えています。エッセーの定義は人によって異なりますが、私はモンテーニュ『随想録』の文章をエッセーとします。『随想録』の原題 *Essais* は、モンテーニュが〈私〉を試みるという意味で名づけたものであり、この文体がイギリスに渡って科学論文や近代文学などの文体をも生むことになりました。エッセーは、あらゆる文章の大元ということが出来ると思います。学生には、あらゆる文章ジャンルの元、それにレポートや論文、小説などのあらゆる基盤となる文章を、あくまで〈私〉を試みる、ということから思考し表現してみようと呼びかけています。

特徴の二つ目は、自分の内面を掘り下げて書くことです。〈私〉を試みる文章を書くのですから、言うまでもないかもしれませんが。三つ目は、二つ目と重なりますが、自己を基点に、自らの内面にある感情や思い、記憶や経験を言語化することです。四つ目は、粘り強く文章を推敲する必要があることです。推敲を促す仕掛けとして、私は「作品化」というキーワードを挙げています。五つ目は、「作品化」から派生する、他者に向けた作品制作です。教員との対話や学生間の相互批評を経て、文章を授業で朗読して発表します。発表の後、さらに自分の考えを他者に発信できるように、文章を Zine 発行します。Zine とは、アメリカのアートシーンで生まれた簡易印刷で、アーティストがお金をかけないで

自分の写真や絵や文章を発表するのに用いられています。日本でもここ数年で広く普及し、美術館でアートシーンとして取り上げられているほか、専門に買い取り・販売を行う店舗も増えています。私の授業でも、学生のエッセーを文集(Zine)として製本します。

私の授業の形態をご紹介します。1年間をかけて行われる授業の場合、前期では「〈私〉の発見」、後期では「〈私〉との関係」という大きなテーマを掲げています。前後期ともに4クールに分けて行い、それぞれに設けた小テーマについて、1,200～2,500字程度のエッセーを書きます。後期の第4クール、つまり1年間の授業の最後に取り組む課題テーマは、「私の〇〇観」です。〇〇を何にするかは、学生が自由に決めます。

どの課題テーマについても、学生は、ご覧いただいている写真にあるようなワークシートやメモを用いて書くネタを探すことから始めます。そして、やはり写真にあるような下書き用の原稿用紙にエッセーを手書きします。この推敲は自分一人で行うのが基本ですが、クラスメイトと一緒にすることも、私が行うこともあります。決定稿ができたなら、それをやはり手書きで清書します。これは私が回収し、内容に目を通してから学生に返却します。内容に目を通す際、技術的なアドバイスを書くこともありますが、何よりも重視しているのは批評することです。私の授業で書くエッセーはあくまでも作品ですから、私には批評する責任があると思います。ただ、批評の全てを文章で書くのは大変なので、書くのは要点だけにし、残りは口頭で伝えることもよくあります。

仕上がったエッセーからいくつか佳作を選び、それを書いた学生に朗読・発表させます。ここで教員は、学生が「表現者としての主体形成」が萌芽した現場に立ち会うことになります。ご覧いただいている写真には、発表中の様子、発表後にクラスメイトから批評を寄せられている様子などが映っています。

授業で書いたエッセーはグループで編集し、文集(Zine)を作ります。編集にあたっては、グループ内で全員が自分の書いたエッセーを持ち寄り、文集に載せるエッセーを厳選し、改めて推敲します。さらに、編集長やデザイン係、タイピング係など、各自の役割も決めます。文章はあまり上手でない学生でも、絵やデザインなどの面で文集作りに貢献できますから、どの学生も主体的に文集作りに取り組めるというわけです。

ご覧いただいている写真が、完成した文集、Zineです。文章を書くことは個人による自己表現ですが、文章をグループで編集する行為は、他者との協同による表現行為であり、これを通して「共同性の表現」が生まれます。左上の写真は、京都造形芸術大学のマンデープロジェクトで学生が作ったZineです。私は3年前にマンデープロジェクトに講師として参加し、自分が最も印象に残っているワークショップについてエッセーを書くというワークショップを創出しました。開いて映っているページには、先ほど銅金先生の発表でも言及されていた「白い部屋」というワークショップについて書いたエッセーが載っています。白とは何か、空間とは何か、といった哲学的、美学的な問題も考察されています。

パーソナル・ライティングの概要を整理しましょう。パーソナル・ライティングでは、〈私〉の体験をととても重視します。これを「掘り下げ」ることによって経験化し、さらに「捉えかえす」ことによって、今の自分にとってその経験がどのような意味、価値を持つものなのかを把握します。経験の意味と価値を把握することが、先ほどお話しした「〇〇観」を生むのです。また、エッセーを作品として発表し、他者から批評される、あるいは他者の作品を批評することによって、表現行為は一周し、表現者としての自己実現に至ると、

私は考えています。

ここからは、パーソナル・ライティングの海外での動向を見ていきましょう。

「パーソナル・ライティング」とは、私が名づけた名称です。海外にも似たようなことを考えた人や実践がないかと、先行研究を探し、それを参考に命名をしました。まだ、日本ではまだほとんど知られていないと思います。ですが、アメリカでは1990年頃から大学教育に取り入れられるようになり、今では偏差値の高低を問わず多くの大学で行われる、かなりポピュラーな教育実践になっています。カナダやイギリス、オーストラリアなどでも同様です。1980年代までは、パーソナル・ライティングを大学で行うことに批判の声が強かったようですが、現在ではそうした声はあまり聞かれなくなりました。研究者も大勢います。ある研究者が、パーソナル・ライティングの意義とメリットについて書いた文章の一節をご紹介します。「初年次生が本物のアカデミックな世界の一員になるためには、まず、自分たちの身近な出来事・経験について書く訓練を行うことが必要である。学生は最初に『緊張しないで快適だと感じられる言語と内容』を綴る学びのなかで、そこで出くわす問いやアイデアを探究する必要がある」。

アメリカでの実践と私が行なっている実践を比較すると、教育理念は共通しています。では、相違点は何でしょうか。アメリカの実践は、Free Writing や Journal Writing に代表されるように、学生自身の自由な発想を大切にし、自由に記述することをとても重視します。一方、私の授業では、自由な発想と記述も尊びますが、そのもう一段階上にある、表現行為を他者と交換することに重点を置きます。粘り強い推敲と思考を実現させ、習慣化させたいからです。

パーソナル・ライティングの教育的効果と検証について見たいのですが、もう時間があまりないので、要点だけをお話します。

ご覧いただいているのは、私の1年間の授業が終わったときに学生に対して行う、自己評価アンケートの結果です。ある年度に、多くの学生が挙げた項目上位五つを抽出してあります。1位には、2項目が同率で並びました。一つは、「自己認識が高まった」。自分がどういう人間なのか、その理解が深まったということです。もう一つは、「推敲の大切さを理解できるようになった、推敲をするようになった」。本学の場合、恥ずかしい話ですが、4月の入学当初は、ほとんどの学生が推敲という言葉を知りません。しかし、何カ月か経つと、「先生、推敲はこれでいいかな」「ちょっと推敲が足りなかった」というように、どの学生も推敲という言葉をよく使うようになります。アンケートの3位には、「読み手を意識して、私を表現できるようになった」が入っています。

次に、後期の最後のクールで取り組むエッセー「私の〇〇観」で、学生が何をテーマに選んだかをご紹介します。自由テーマですから、私は学生に「自分にとって、今、考えてみるに値する最も切実なことであれば、何をテーマにしてもいいよ」と伝えます。すると、大半の学生が「文章表現と私」もしくは「自己表現」をテーマに選びます。ご紹介している年度では、59人中47人がそうでした。

ここでご紹介したのは、あくまでも学生の自己評価なのですが、教員にとっても示唆に富むものであると、私は考えています。それは、学生の意識が、文章表現を通してどのような文章観や言語観を育んだかという主体の立ち上げ、すなわち「〈私〉の立ち上げ」に関する問題に集約されていると見られるからです。文章観や言語観に意識的になるというこ

とは、文章表現者としての自意識や書き手としての身構えが生まれているということであり、そのあり方事態が「文章表現者あるいは表現者としての主体」を形成していると思えて良いのではないのでしょうか。〈私〉が自己の内部に育まれ、自覚されれば、他律的で外在的な文章表現を脱することにつながるはずです。

最後に、ちょっとした事例をご紹介します。

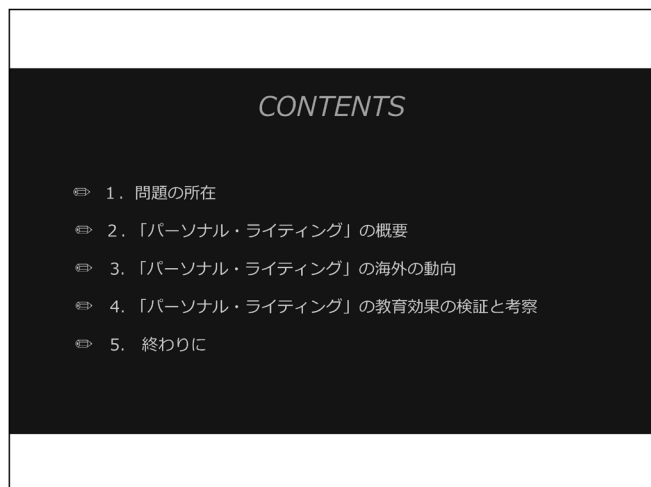
授業の最終段階にグループで協同して取り組む文集 (Zine) 作りでのことです。ある学生が書いた、言葉の経験についての作品、エッセーが話題に上ったのがきっかけで、書く経験から得られた言葉の不思議や難しさについての話し合いになりました。その中で、一人の学生が「なぜ言葉には意味があるのか?」という疑問を發しました。これを受けて、言葉には最初から一義的な意味が備わっているのではなく、いわば単なる偶然によって文字や音声と意味とが結びついているに過ぎないという話に発展したのです。その疑問を發した学生は言語学者ソシュールの説く「言語の恣意性」や「シニフィアン／シニフィエ」といった概念に言及したわけではありませんが、話し合いを聞いていた私は、その学生の疑問、気づきが言語学の認識と符合することを示唆しました。その学生は、この話し合いによって言語学に関心を抱くようになり、4年生になった今でもそれを持続させています。卒業論文のテーマにしているほどです。

今の話は、本当に些細な事例に過ぎません。ただ、次のように評価できると、私は考えています。すなわち、学生が自分の切実な実感に信を置き、さらに「私はなぜそのように感じるのか?」と思考し表現したとき、はじめて、その深度に比例して、〈私〉から他者、社会、世界へと射程を拡張する力が生まれることを雄弁に物語る事例である、と。私の授業は、こうした学生の力を信じるプログラムです。

以上で私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



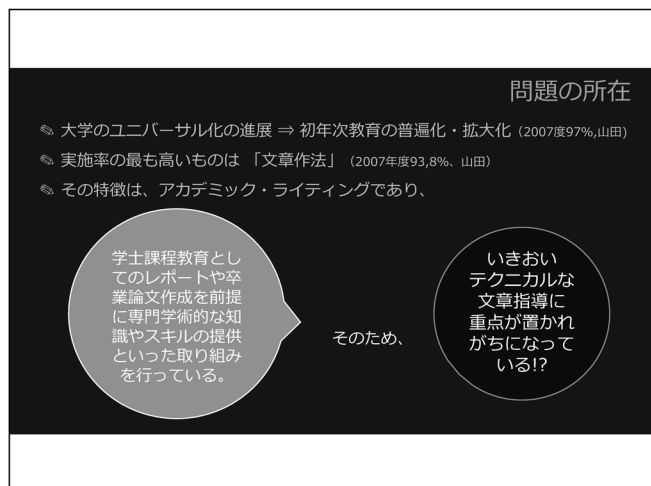
1



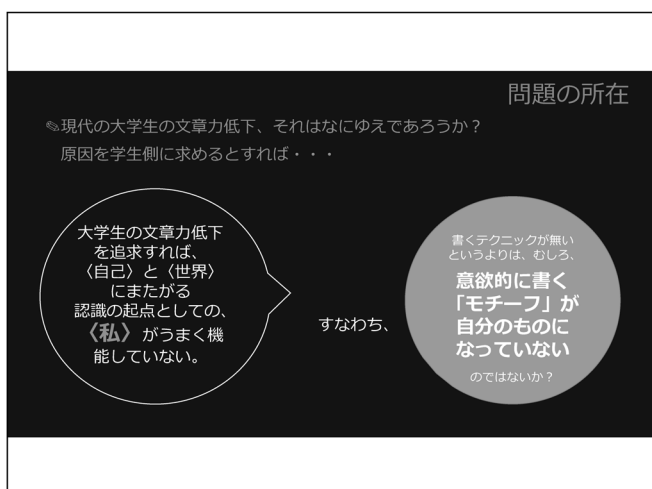
2



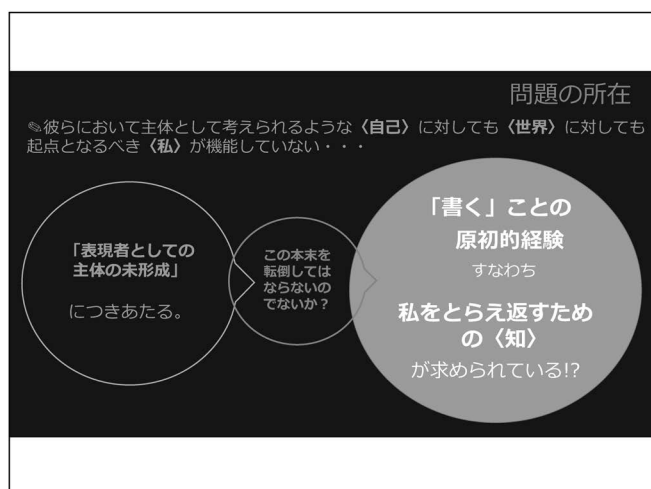
3



4



5



6

「パーソナルライティング」の概要

7

「パーソナルライティング」の概要

④「パーソナル・ライティング」の教育理念

高等教育における
〈私〉と専門学術
的な著しい乖離

「書く＝考える」
ことが、
外在的で形式的な
こなされるべき
義務になりがち。

「書く＝考える」
ことが、内発的な
学びと表現への模
索や思考に「結び
つきにくい」状況
がある。

ハウツー的な技術の伝授でも、専門知識の注入でもなく、
「書く＝考える＝表現する」ことが、
学生の内発的な学びや動機をきっかけになるように！

8

「パーソナルライティング」の概要

④「パーソナルライティング」の教育理念

④日常的な出来事や生活体験を題材に思索する。
経験における感覚の感受を「掘り下げ」HOW?
経験の意味の「とらえ返し」WHY? をめざす。

④頭の中や胸の内にある未定形であいまいな思いに言葉を与える。
自分がどのような感受性や価値観をもつ人間かを確認する。

④確かめられた言葉や表現を他者と交換しようと努力する。
他者・社会・時代（観）への関心につながり、
専門課程への学びやキャリアイメージへと接続させる。

9

「パーソナルライティング」の概要

④「パーソナルライティング」の実践のあらまし

④特徴1：文章ジャンルとしてのエッセー（Personal Essay）

④特徴2：内面の掘り下げ・HOW?／とらえ返し・WHY?

④特徴3：自己を基点に、自らの内面にある感情や思い、記憶や経験を言語化

④特徴4：粘り強い「推敲」で「作品化」

④特徴5：他者に向けた作品制作（教員との対話、相互批評、自作朗読、Zine発行）

技術面を重視
した文章技術
指導のための授
業とは異なる
特徴

10

「パーソナルライティング」の概要

④授業の形態と特徴

課題テーマ（1200字～2500字程度）

〈私〉
の発見

〈私〉
との
関係

前期
全体テーマ：「心——私の感じ方」
第1クール 悲しかったこと
第2クール 嬉しかったこと
第3クール 好き嫌い感覚
第4クール 記憶に残っていること

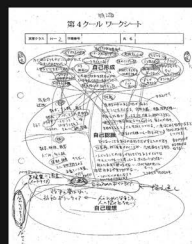
後期
全体テーマ：「エッセー——〇〇と私」
第1クール あの人を語る
第2クール 感覚を描く——色・音・匂い・味
第3クール 魅力を解剖する
第4クール 私の〇〇観

11

「パーソナルライティング」の概要

④目標達成へのプロセス I

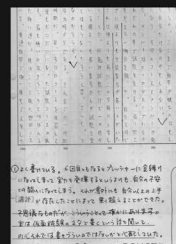
ワークシート作業



メモ作り



清書原稿→批評



12



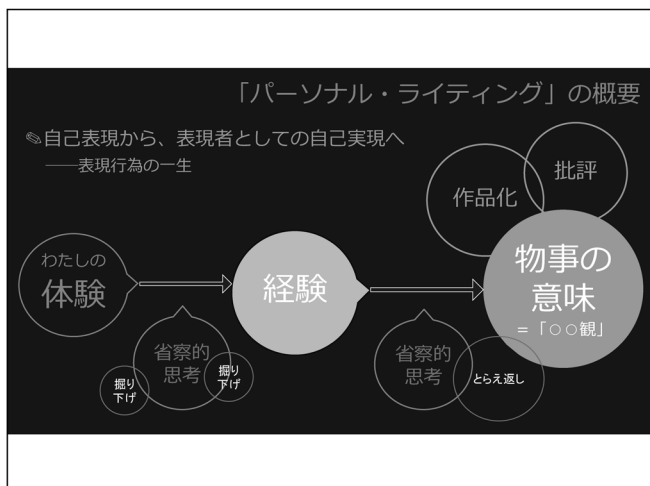
13



14



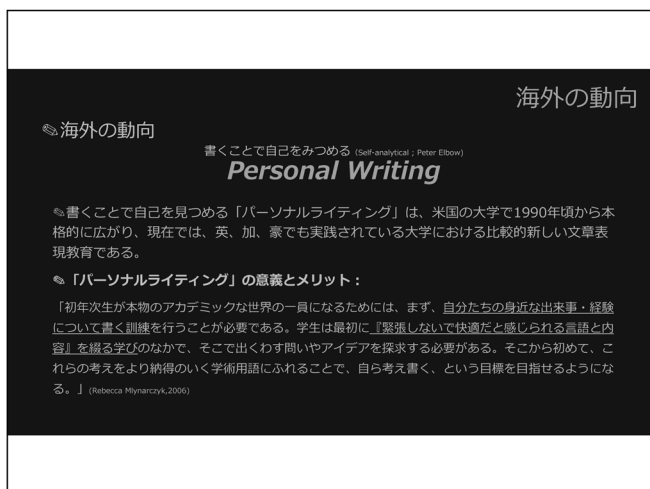
15



16



17



18



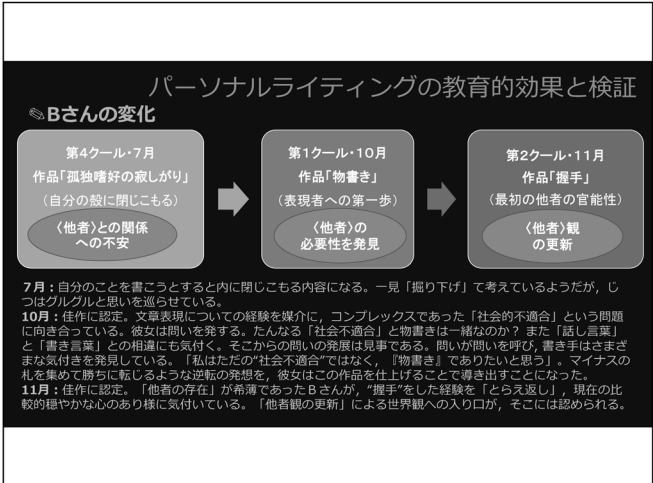
19



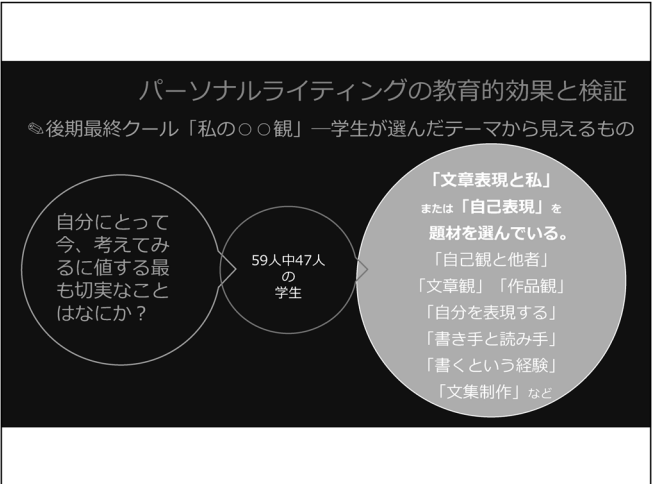
20



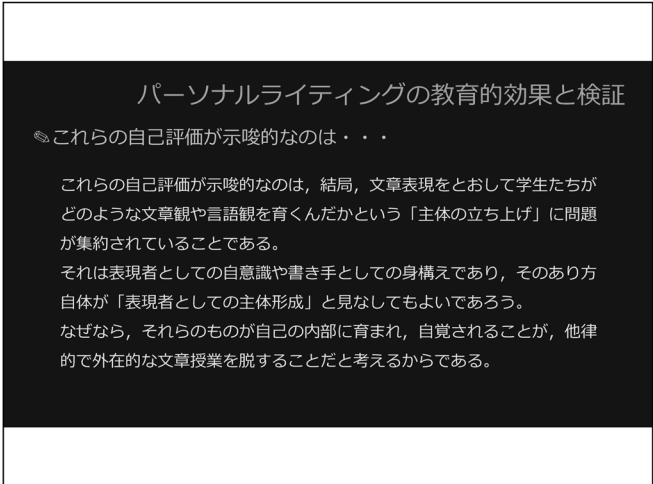
21



22



23



24

おわりに

25

言葉の経験について書かれた作品が編集会議にあがった。「書く」経験から得られた言葉の不思議さや難しさを話し合っていた際、一人の学生が「なぜ言葉には意味があるのか？」という疑問を発した。そこから、言葉にはじつは最初から一義的な意味が具わっているのではなく、いわばたんなる偶然から、文字や音声とある意味とが結び合っているにすぎないという話に発展した。

ソシュールの「言語の恣意性」や「シニフィアン/シニフィエ」といった概念を持ち出したわけではないが、私はその疑問の目覚めに対して、「言語学」と彼女の気づきがぴったり符合することを示唆した。その学生は、そのときの合評会をきっかけに、言語学への関心を持続している。

これは一つの実例にすぎないが、学生たちが自分の切実な実感に信を置き、しかも「なぜ、私はそのように感じるのか？」と思考し、表現したとき、その深度に比例して、〈私〉から他者、世界へと射程を拡張する力が生まれる。そのことを信じるプログラムである。

26

ご清聴ありがとうございました。
Thank you!



avocatmina@yahoo.co.jp
谷 美奈（たに みな）帝塚山大学

27